福礼古墳発掘調査報告

1973

広島県教育委員会

福礼古墳発掘調査報告

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に …… 1

Ⅱ　福礼古墳の位置および環境 …… 2

Ⅲ　発掘調査の経過 …… 7

Ⅳ　古　墳 …… 11

　1　墳丘と外表施設 …… 11

　2　内　部　主　体 …… 14

　3　出　土　遺　物 …… 15

Ⅴ　中　世　墳　墓 …… 18

　1　土　壙 …… 18

　2　出　土　遺　物 …… 20

Ⅵ　ま　　と　　め …… 23

図 版 目 次

図版 1　a 福礼古墳遠景　b 同上近景
図版 2　a 内部主体全景（上，粘土槨　下，土壙）　b 同上
図版 3　a 内部主体全景　b 埴輪出土状態
図版 4　a 中世墳墓（下，N 1 土壙　上，N 2 土壙）　b 同上
図版 5　a 中世墳墓（左，N 3 土壙　右，N 4 土壙）　b 中世墳墓（E 土壙）
図版 6　土師質土器・埴輪

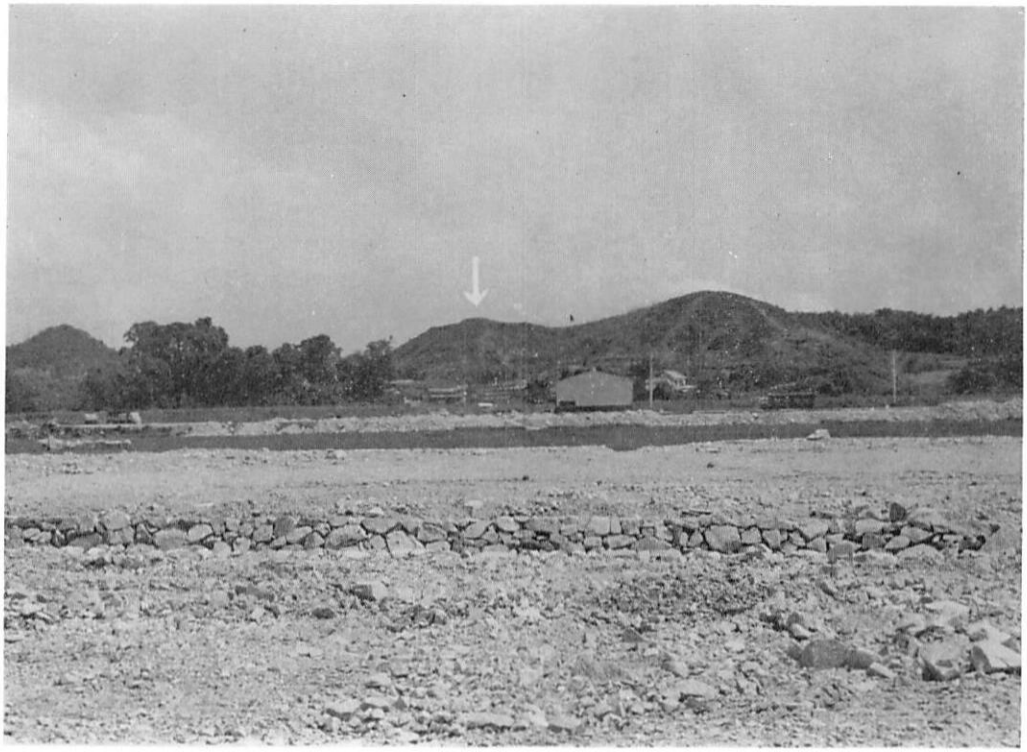
挿 図 目 次

第 1 図　福礼古墳位置図 …… 2
第 2 図　福礼古墳付近出土須恵器実測図 …… 3
第 3 図　福礼古墳付近地形図 …… 11
第 4 図　墳丘断面図 …… 12
第 5 図　第 1 トレンチ東側実測図 …… 13
第 6 図　粘土槨・土壙実測図 …… 14
第 7 図　鉄刀実測図 …… 15
第 8 図　刀子実測図 …… 16
第 9 図　埴輪実測図 …… 16
第10図　土壙墓群実測図 …… 18
第11図　E 土壙実測図 …… 19
第12図　土師質土器実測図 …… 20

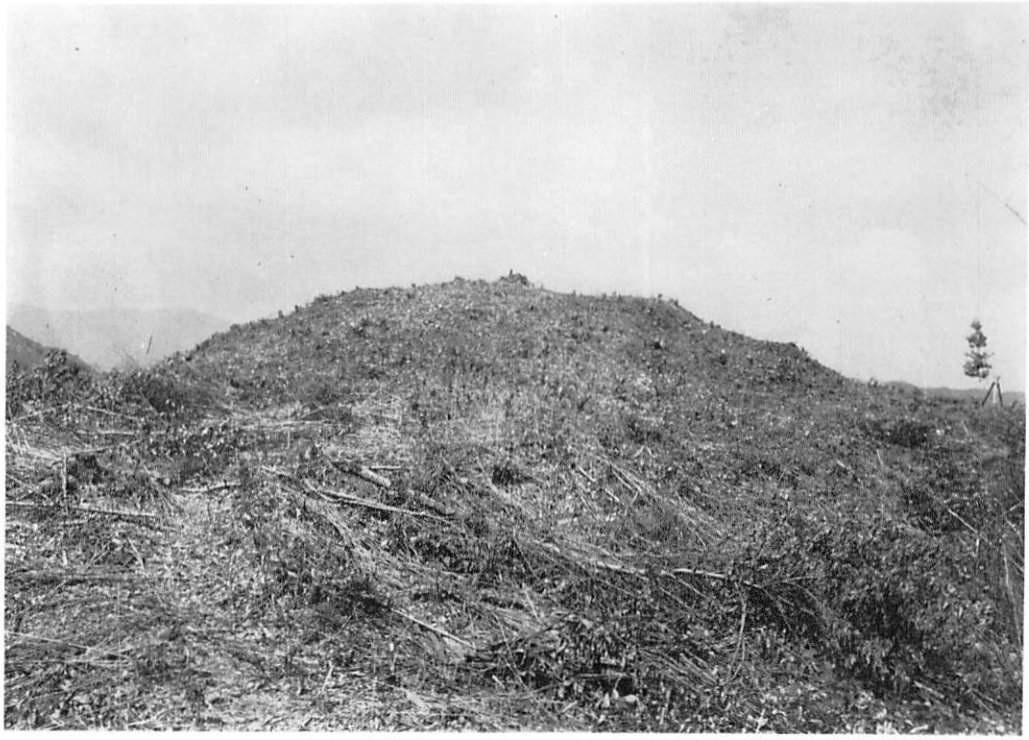
図 表 目 次

第 1 表　古墳盛土計測表 …… 12
第 2 表　埴輪出土地地名表（本郷町周辺） …… 17

図版1

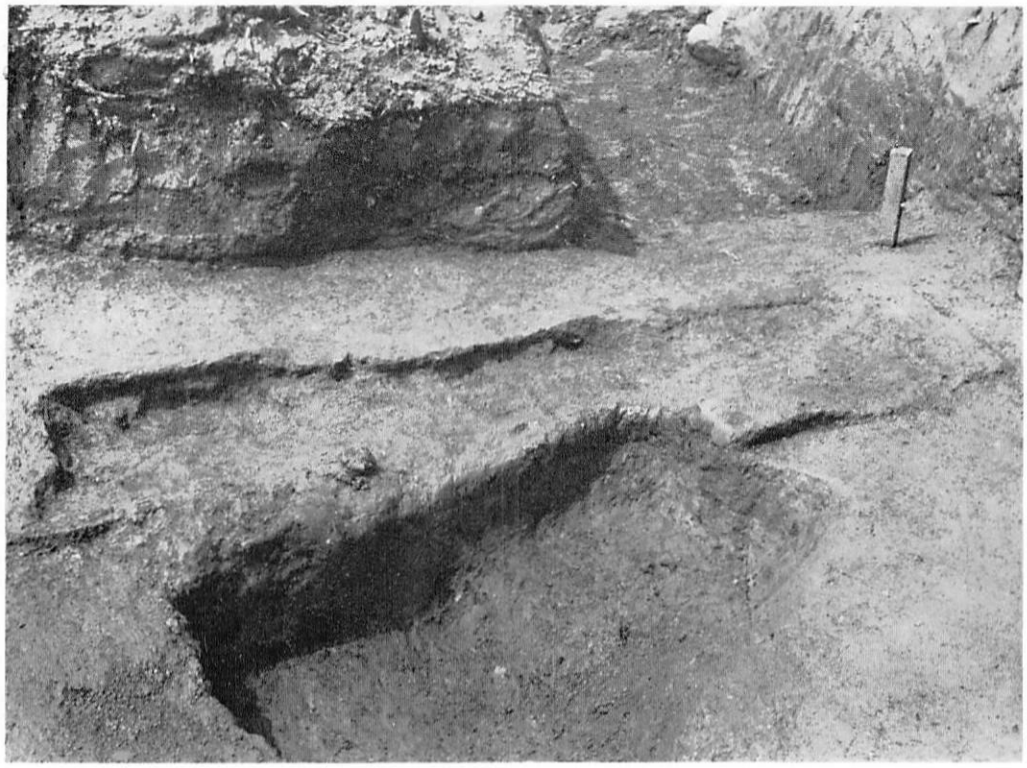


a. 福礼古墳遠景（↓）

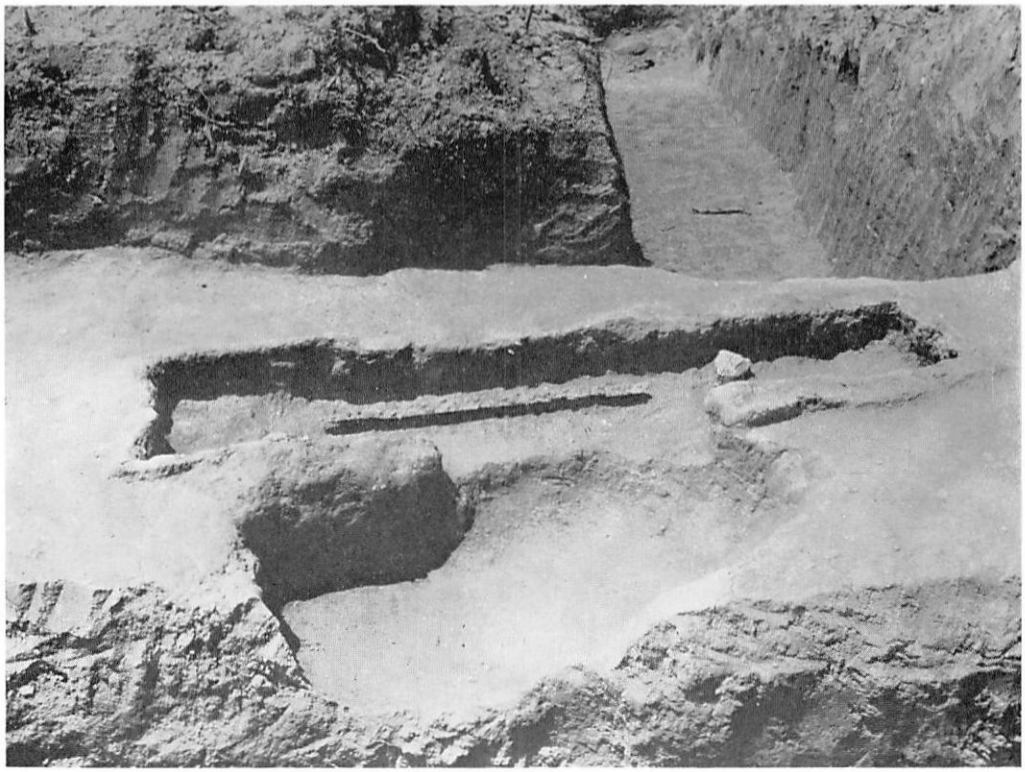


b. 同 上 近 景

図版2



a. 内部主体全景（上．粘土槨，下．土壙）



b. 同　　上

図版 3

a.　内部主体全景

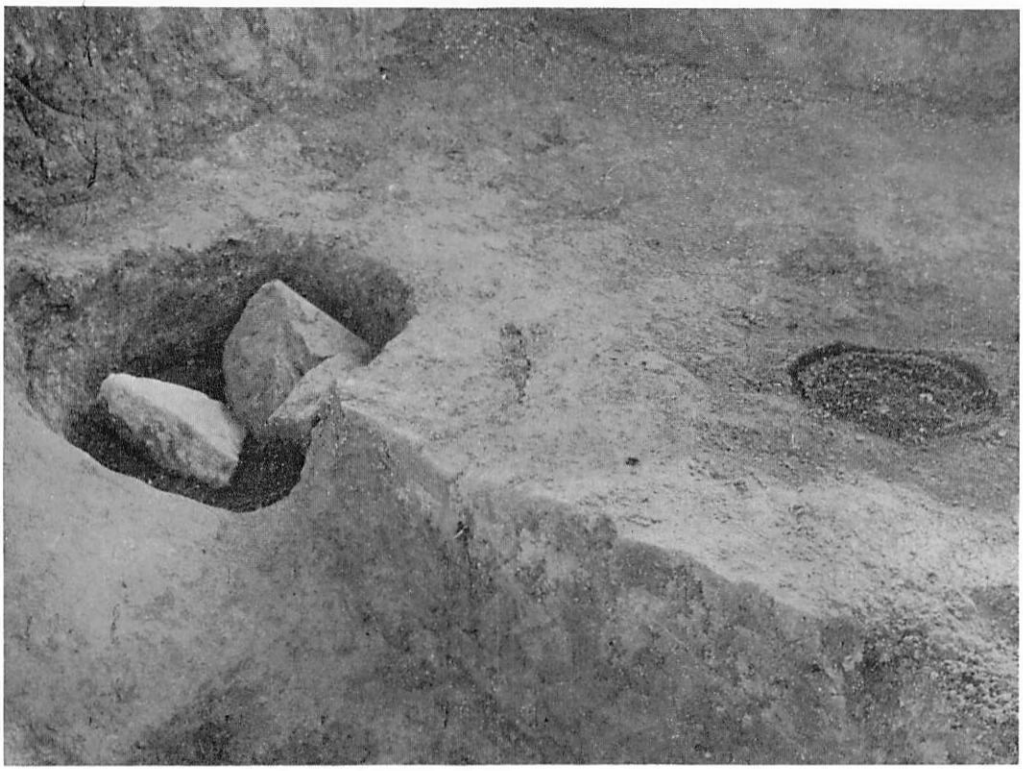
b.　埴輪出土状態

図版 4

a. 中世墳墓（下. N 1 土壙,　上. N 2 土壙）

b. 同　　上

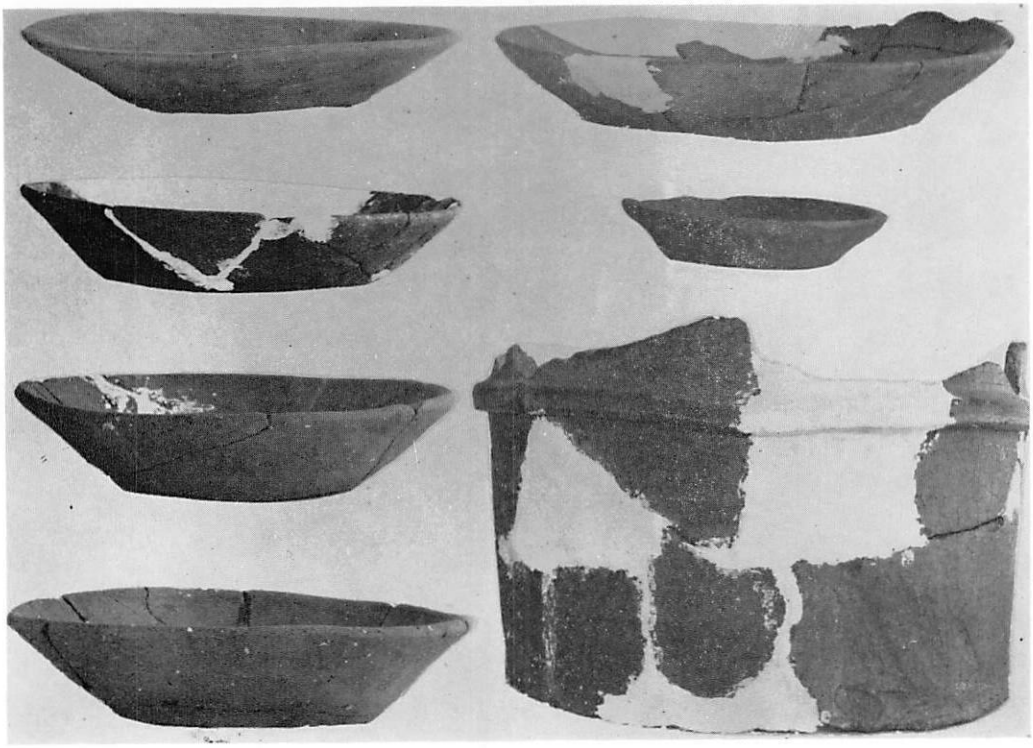
図版5



a. 中世墳墓（左．N 3 土壙，　右．N 4 土壙）

b. 中世墳墓（E 土壙）

図版6



土師質土器（1：2）　　埴　輪（1：4）

I はじめに

豊田郡本郷町の沼田川下流およびその支流地域は，県下でも遺跡の数の多いところとして知られており，学術的にも貴重なものが多い。しかし，これらの遺跡については，あまり調査が進んでおらず，未解決の問題を多くかかえた地域である。

今回調査を行なった福礼古墳はこれらの遺跡を指呼の間にのぞむ三原市沼田西町と豊田郡本郷町の境界にあたる丘陵の頂上に位置している。

昭和47年6月5日，県教育委員会は，三原市立糸崎小学校教諭楪博自氏からの通報により，三原市教育委員会を通じて，福礼古墳のある丘陵が，三菱建設株式会社によって団地造成されることを知った。このため西本省三文化財保護室々長補佐と河瀬正利文化財保護主事の両名を現地に派遣し，三菱建設株式会社や関係者とその内容について検討するとともに保存の措置について協議をおこなった。

それによると三菱建設は，この丘陵を削平して，100,000㎡の工場用地と25,000㎡の住宅用地を確保するというもので，地元もこの工場進出を歓迎し，すでに用地買収には手付金が支払われ,樹木伐採を終っている状態であった。しかも,この古墳が丘陵頂上に立地するため,設計変更による保存の措置がきわめてむづかしく,その上工事を急ぐという悪い条件下にあった。そのため，県教育委員会は，やむをえず事前に発掘調査をおこない，記録保存の措置をとることに踏切ることにし，三菱建設株式会社に発掘調査費64万円の負担を申し入れるとともに埋蔵文化財発掘届の提出を求めた。

調査は,三菱建設株式会社の委託をうけて広島県教育委員会が実施することとし,6月29日から県教育委員会指導主事,金井亀喜,脇坂光彦,小都隆の3名がこれにあたった。

おり悪しく梅雨期であったため，天候不順により，再三調査を中断せざるをえず，調査期間と経費の制約に悩まされたが7月19日全ての調査を終了することができた。

なお，この調査にあたって，終始協力の労を惜しまれなかった三菱建設三原営業所所長代理高崎清登，谷原守一氏をはじめとする同営業所の方々，旧土地所有者の板原勉氏や重本実氏などの地元関係各位に対し厚く御礼申し上げる。

また，第2表の本郷町周辺の埴輪出土地地名表については，福井万千氏（広島大学考古学研究室）の作成になるものである。感謝の意を表します。　　（金井亀喜）

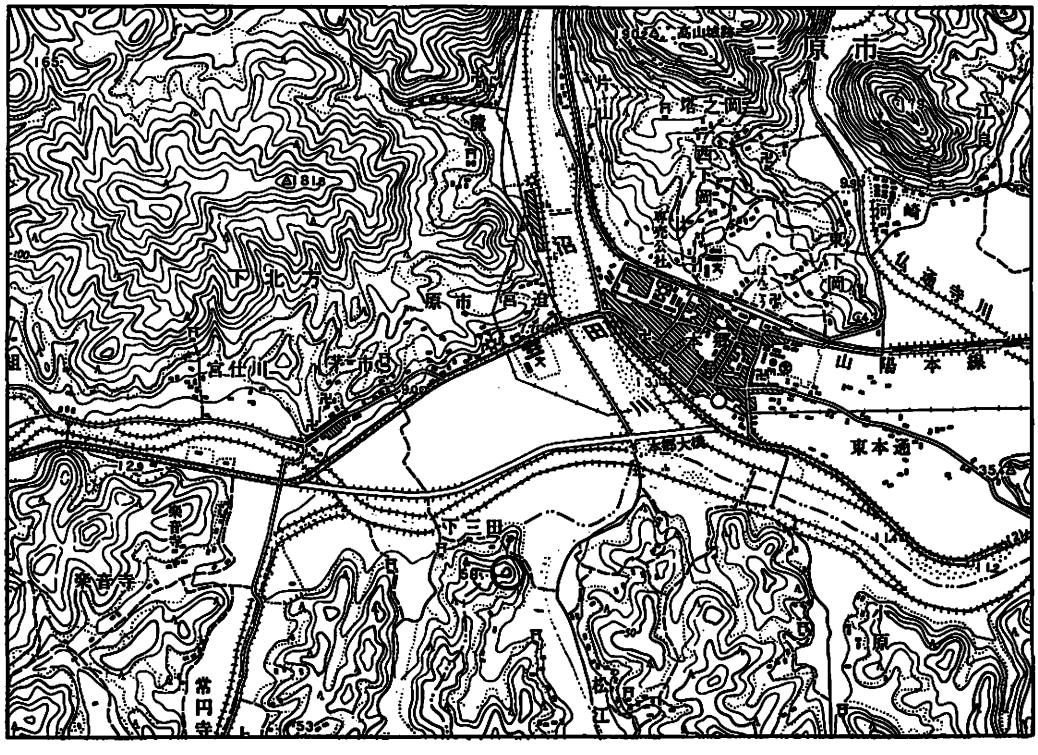
Ⅱ　古墳の位置、および環境

福礼古墳は豊田郡本郷町大字南方字福礼と，三原市沼田西町松江字下垣内との境界に位置している。

地番でいえば，三原市沼田西町松江字岡地187，188，字下垣内2274，2275，2255，2256，2264，および豊田郡本郷町大字南方字福礼1032～1にあたる。

この地域は沼田川本流に，その支流である尾原川，梨和川などが合流するところであり，これらの川によって本郷町および三原市のある沖積平野が形成されている。

福礼古墳はこの沖積平野の南側にあり，南から北にびる丘陵のほぼ先端部の尾根上に位置している。墳頂は標高48.5mで本郷町一帯の平野部を眺望する好所にある。この平野の北側には丘陵にそって古代山陽道が走り，また現在では山陽本線および平野の南側には国道2号線が走るなど，この地域は古今を問わず交通の要路となっている

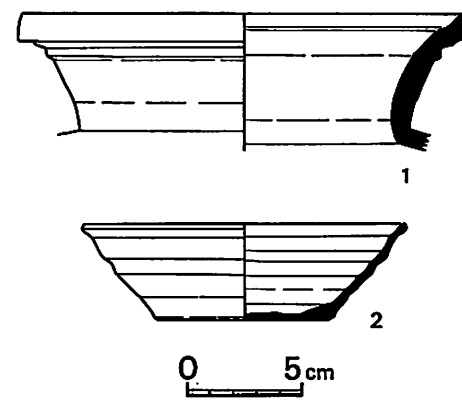


第1図　福礼古墳位置図

ため，最近では工場の建設，宅地造成などの開発が進み，付近の遺跡は破壊の危機にさらされている。

福礼古墳周辺の豊田郡本郷町本郷，下北方，南方，三原市沼田西町一帯は，県下でも有数の遺跡密集地域であり，一番古いものとしては縄文時代後期の遺跡が知られている。[①] 弥生時代には遺跡の数は増加するが，特に後期の土器を出土するものが多い。[②] 福礼古遺に隣接した遺跡として松江遺跡（沼田西町松江字下垣内）がある。福礼古墳と同じ丘陵で北側斜面に位置し，水田開拓工事により発見されたもので，遺物として弥生式土器（前,中期)、石鏃，磨製石斧，土師器が知られている。[③] また松江遺跡と対面する東側の丘陵上には久松遺跡（沼田西町松江字久松）があり，土師器を中心とした遺物包含層の断面が深さ約２ｍ，幅は20ｍ以上にわたって露出している。土師器の外には弥生式土器，石鏃，須恵器，埴輪片などがみられる。[④] 第２図２はここより出土した須恵器の身で口径14.0cm，器高４.１cmの平底である。

この遺跡の西南方には久松遺跡とほぼ同じ性格をもつと思われる板箭遺跡があり，土師器，須恵器，埴輪片の出土が伝えられている。[⑤] さらに福礼古墳の南東に下った傾斜面には，深さ１ｍ，幅約６ｍの土師器，須恵器を中心とした遺物包含層がみられる。第２図１はこの包含層中より出土した須恵器で，口径19cmの横瓶の口縁部であるが，時期的にはややくだるものであろう。



第２図　福礼古墳付近出土須恵器実測図

古墳はなだらかな傾斜をもつ丘陵を中心に数多く存在するが，その内部主体から，① 箱式石棺，② 粘土槨あるいは粘土床で木棺直葬と思われるもの，③ 横穴式石室，④ 横穴式石室内に家形石棺を有するものに大別することができ，つぎのような古墳が知られている。[⑥]

① 箱式石棺と思われる古墳

名称	所在地	墳形	遺物	その他
苅安古墳	本郷町南方	円墳		
杉臼2・3・6・7号墳	〃			7号は昭和36年頃人骨出土
是宗古墳	〃			
中山2・6号墳	〃	6号円墳		
天甲3号墳	〃	円墳		
大谷1・2・4号墳	〃	1号円墳 4号前後円墳	4号から人骨・管玉	2号の石棺全壊
大菜原2・3号墳	〃	3号円墳	3号土師器散布	
下垣内古墳	沼田西町			福礼1号墳ともいう
江尻1号墳	〃	円墳		
朝武3号墳	〃			
助政1・2号墳	〃	円墳		
須郷古墳	〃			
麓1～5号墳	本郷町本郷			2・4号は全壊
陣べら箱式石棺群	本郷町下北方			8基 昭和45～46年調査
高木古墳	〃	円墳		

② 粘土槨あるいは粘土床で木棺直葬と思われる古墳

福礼古墳	本郷町南方・沼田西町	円墳		
陣べら1号古墳	本郷町下北方	〃		昭和45～46年調査
鳩岡古墳	沼田東町	〃	埴輪・鏡・玉類・鉄斧・鉄鏃など	
峠越2号墳	本郷町上北方		釘	

③ 横穴式石室墳

天甲1・2号墳	本郷町南方	円墳		
大菜原4号墳	〃			
矢跡4号墳	〃	円墳	須恵器坏	
神ノ木1・2号墳	〃	2号円墳	2号より須恵器高坏・壺	
朝武1号墳	沼田西町	円墳	銀環・玉類・須恵器壺・提瓶・器台	
キリモチ古墳	〃	〃	須恵器壺	
広沢古墳	〃		須恵器坏・壺	全壊

土肥谷1号墳	本郷町本郷		須恵器高坏・坏・平瓶・把頭	
塔の岡1号墳	〃	円　墳		
片山1号墳	〃	〃	勾玉・管玉・ガラス玉・刀・よろい・須恵長頸坩	
片山2号墳	〃		須恵器・鏡	
梅木平1号墳	本郷町下北方	円　墳		県史跡
梅木平2号墳	〃		埴　輪	破　壊

④　横穴式石室に家形石棺を有する古墳

御年代古墳	本郷町南方	円　墳	馬具・金環・銅環・刀・須恵器・土師器・人骨	史　跡
貞丸1・2号古墳	〃			県史跡 2号墳は現在石棺を失なっている。
溜　箭　古　墳	三原市沼田西町	円　墳	円筒埴輪	石棺は長円寺,常盤神社が分有。

これらの埋葬方法とは別に，陣べら遺跡では土壙墓群（11基）が確認されており[7]，また南方の中山5号墳は竪穴式石室をもつものと考えられている。

以上の外に注目すべき古墳として，まず県史跡の兜山1号墳(三原市沼田東町納所)があげられる。内部主体は不明であるが，大正12年に試掘され，墳丘東側で円筒埴輪列を検出し，他に人面の埴輪，鉄片が出土している[8]。

また兜山に近接する宮の谷4号墳は内部主体はあきらかでないが，形象埴輪・刀・須恵器・玉類・鉄鏃・鍬などが出土している。さらに本郷町下北方には箱式石棺を主体とする宮仕川古墳群があり，そのうち4号墳は全長22mの前方後円墳で，画文帯神獣鏡・勾玉を出土し，朱塗りの人骨も発見されている。

このように，本郷町周辺の古墳は様々の形態や規模をもっており，古墳自体の研究だけでなく，古代集団の変遷を知る多くの資料があるが，これらの研究はあまり進んでいるとはいえない。

歴史時代の遺跡としては，まず横見廃寺（本郷町下北方字宮地川）があり，奈良前期からの寺院跡であることが確認されている[9]。この付近一帯は，古代律令制下においては沼田郡に属し，山陽道の梨葉駅が本郷町に設けられたとされており，また平安時代には，京都蓮華王院を本家とする沼田庄の中心地で沼田氏の勢力下にあったが，源平合戦の際沼田氏が平家方に組して滅亡後，沼田庄は鎌倉の御家人小早川氏(土肥氏)

が地頭として支配するところとなった。その後，小早川氏は高山城の築城とともに沼田庄を中心にして，鎌倉・室町時代を通じ安定した支配を続けたが，天文年間に毛利元就の子隆景が竹原小早川氏の養子となり，沼田小早川氏をあわせるにおよんで，しだいに毛利氏の勢力下に入っていった。

平安から鎌倉時代の遺跡としては，経塚[10]・五輪塔・宝篋印塔[11]などが知られ，また横見廃寺の向いの丘陵山腹には，沼田氏が創建したといわれる楽音寺[12]（本郷町南方）があり，その南約2㎞には楽音寺と密接な関係にあった蟇沼（ひきぬま）寺（東禅寺）がある。さらに楽音寺に近い本郷町下北方茅市には，沼田氏の本拠といわれる沼田（高木山）城跡があり，その背後の小早川氏の居城高山城は標高181mの丘陵上に位置する典型的な山城であり，国史跡に指定されている。（脇坂光彦）

（注）

① 片山遺跡・宮地川遺跡がある。
② 特に塔の岡遺跡付近の台地に多い。
③ 加藤貞雄「安芸沼田川沿岸の弥生式遺跡」（『考古学』第7巻第8号1936）
福井万千「松江遺跡出土の土器」（『土師質土器集成』本編Ⅰ1971）
④ 芸備友の会「三原市沼田西町松江久松遺跡出土石鏃」（『芸備』No. 2 1972ガリ刷り）
⑤ 福井万千氏のご教示による。
⑥ ①・③・④は本郷・下北方・南方・沼田西町のものに限った。
⑦ 潮見　浩『陣べら遺跡発掘調査概報』（1971）
⑧ 吉野益見「安芸豊田郡沼田東村兜山古墳」（『考古学雑誌』27巻3号1937）
広島県教育委員会「沼田東村甲山古墳」（『史跡名勝天然記念物調査報告第1集』1929）
⑨ 広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査Ⅰ』（1972）
⑩ 野田経塚・宮地川経塚が知られている。
⑪ 小早川氏の氏寺米山寺の宝篋印塔は重文に指定されている。
⑫ 楽音寺文書（鎌倉時代以来の中世文書）50余通，および縁起絵巻が所蔵されている。

Ⅲ 発掘調査の経過

福礼古墳は丘陵のほぼ先端部で平野部からよく眺められる位置にあり，墳形も整っているため早くから古墳であることが知られていた。墳丘の西および南東側には張り出した緩傾斜面があり，前方後円墳ではないかと考えられ，盗掘も度々なされてきたようである。しかし，主体部と思われる墳頂からは何も検出されておらず，裾から埴輪片が少数出土したといわれている。

調査は，昭和47年６月29日から７月19日まで行なったが，途中集中豪雨のため作業を１週間中断した。

まず，南東部の張り出し部分が前方部である可能性を考慮して，この部分と墳丘とを結ぶ幅1.5mの第１トレンチを設定し，さらに第１トレンチに直交する幅1.5mのほぼ南北の第２トレンチを設定した。

第１トレンチ

墳頂部においては，表土下に地山に似た黄白色のまさ土が30～40cmの厚さで認められたが，この下層には暗褐色の有機質土があり，さらにその下層が地山面となっている。地山面は墳頂部の約５mが，ほぼ水平となって，削平されたものと思われることから，地表下の黄白色土は盛土であると考えられた。しかし，主体部は確認されず，遺物も認められなかった。

地山面は墳丘の裾にむかって傾斜しているが，墳丘と張り出し部との境目にあたる東裾部（第１トレンチＥ）において，埴輪が多数検出された。埴輪は円筒埴輪であるが，原形をとどめたものはなかった。トレンチを拡張して，埴輪列の確認につとめたが，破片が散乱するのみで，その配置状態はつかめなかった。西側の裾においても埴輪片がみられたが，遺構としてとらえられない。

また，これらとは別に第１トレンチＥにおいて径約70cmの浅いピット（第１トレンチＥ土壙）が検出され，土師質土器と人骨が出土した。

第２トレンチ

盛土の状態は第１トレンチとほぼ同様であるが，墳頂の南よりで，地山直上に粘土槨が検出された。東西に長いのでトレンチを拡張したところ，長さ約2.2m，幅50～

60cmの規模をもち，粘土の厚さは20cm程度であまり良質のものを使用していない。内部からは直刀・刀子・小石２が認められたにすぎなかった。

北および南の裾においても埴輪片が散見されたが，北側（第２トレンチN）では新しい時期の土壙４基（Ｎ１～Ｎ４土壙）が確認された。なかでもＮ１土壙が最も大きく，145×90cm の長円形をなし，土師質土器を伴い，Ｎ２，Ｎ３からは人骨が検出され，Ｎ４は火葬墓と思われた。

第３，４，５トレンチ

第１トレンチで確認されなかった埴輪列の状態をつかむため，第１トレンチＥから第２トレンチＮにかけて幅１mのトレンチ３本を設定したが，埴輪片が散見されるのみで遺構としてはとらえられなかった。

第６トレンチ

第２トレンチで検出された粘土槨は，墳丘全体からみるとその位置が南側にかたよっており，他に主体部が存在することも考えられたため，第６トレンチを設定した。しかし，遺構は何ら検出されなかった。

発掘調査日誌抄

1972年

６月29日　（木）くもりのち雨

朝，広島を出発し，豊田郡本郷町の現場へむかう。午前中に慰霊祭を終え，午後，発掘調査の打ち合わせを行う。

６月30日（金）　晴

墳丘を中心に下草刈りを行ない，百分の１の平板測量を行なう。午後，古墳の近景および遠景写真撮影を終え，墳丘をほぼ東西に走る幅1.5m のトレンチ（第１Ｔ）を設定し，排土にかかる。

７月１日（土）　晴

第１Ｔ……墳丘東側麓より埴輪片が多数出土。１個体分は底部が接合した状態で出土したが，他は散乱しており不明である。

第１Ｔに直交するほぼ南北のトレンチ（第２Ｔ）を設定し，排土にかかる。

７月３日（月）　晴のちくもり

第１Ｔ……主体部が発見されないので，地山面まで掘りさげ，盛土および地山面の状態を検討する。

第１Ｔ，第２Ｔとも墳丘麓で埴輪片が散見されたので，埴輪が墳丘をめぐっていたものと考えられる。

７月４日（火）　くもり

第１Ｔ……墳丘東裾（第１ＴＥ）の埴輪の広がりをつかむためトレンチを拡張した。

第２Ｔ……中央部のやや南寄りで地山直上に青黒色の粘土が60cm幅で検出され，東西方向に伸びているようなのでトレンチを拡張したところ，長さ約2.2m の粘土槨があらわれた。粘土は良質のものではないが主体部のようだ。裾北側（第２ＴＮ）で土師質土器が出土し，ピットのような落ち込みがあるようだ。

７月５日（水）　雨

埴輪列の存否を確かめるため，第１ＴＮ，第２ＴＮ間に幅１mのトレンチ３本を設定し，排土にかかる。（第３，４，５Ｔ）

７月６日（木）　雨のちくもり

第３，４，５Ｔ……地山まで掘りさげたが，埴輪片・土師土器片が散見されたのみである。

７月７日（金）　くもり

粘土槨……清掃および写真撮影をおこない，実測を開始した。

７月10日（月）　雨

第２ＴＮ……土師質土器の下方にさらに同様の土器がみられ，これらは土壙中にもあるようだ。

７月11日（火）　雨

豪雨のため作業は行なわなかった。雨が続きそうなので，ひとまず作業を中止することにした。

７月17日（月）　晴

作業を再開する。

粘土槨……粘土を少しずつはがしていったところ，南よりで長さ約88cmの直刀が検出された。

第１ＴＳ……埴輪列はつかめず，多数の破片が出土したのみである。

第２ＴＮ……土師質土器のある落ちこみの性格を知るためトレンチを拡張したところ，土師質土器を伴なった土壙（Ｎ１土壙）と，人骨を含む土壙（Ｎ２土壙）が検出された。

７月18日（火）　晴

粘土槨……あらたに長さ約10cm の刀子と小石２個が発見された。写真撮影を行ない実測を完了した。

第１ＴＥ……トレンチ拡張部から人骨・土師質土器を含む土壙（Ｅ土壙）が検出された。

第２ＴＮ……西壁にピットが認められたので，さらにトレンチを拡張したところ，新たに土壙２基（Ｎ３土壙，Ｎ４土壙）が発見された。これらの土壙の写真撮影，実測を完了。

第６Ｔ……中央粘土槨は墳丘全体からみるとやや南側にかたよっているので，第１ＴＥと第２ＴＮにはさまれた墳頂部にトレンチを設定したが，遺構は何ら検出されなかった。

７月19日（水）　晴

第１Ｔ，第２Ｔの断面図の作成および写真撮影，その他すべての作業を完了し，調査を終えた。

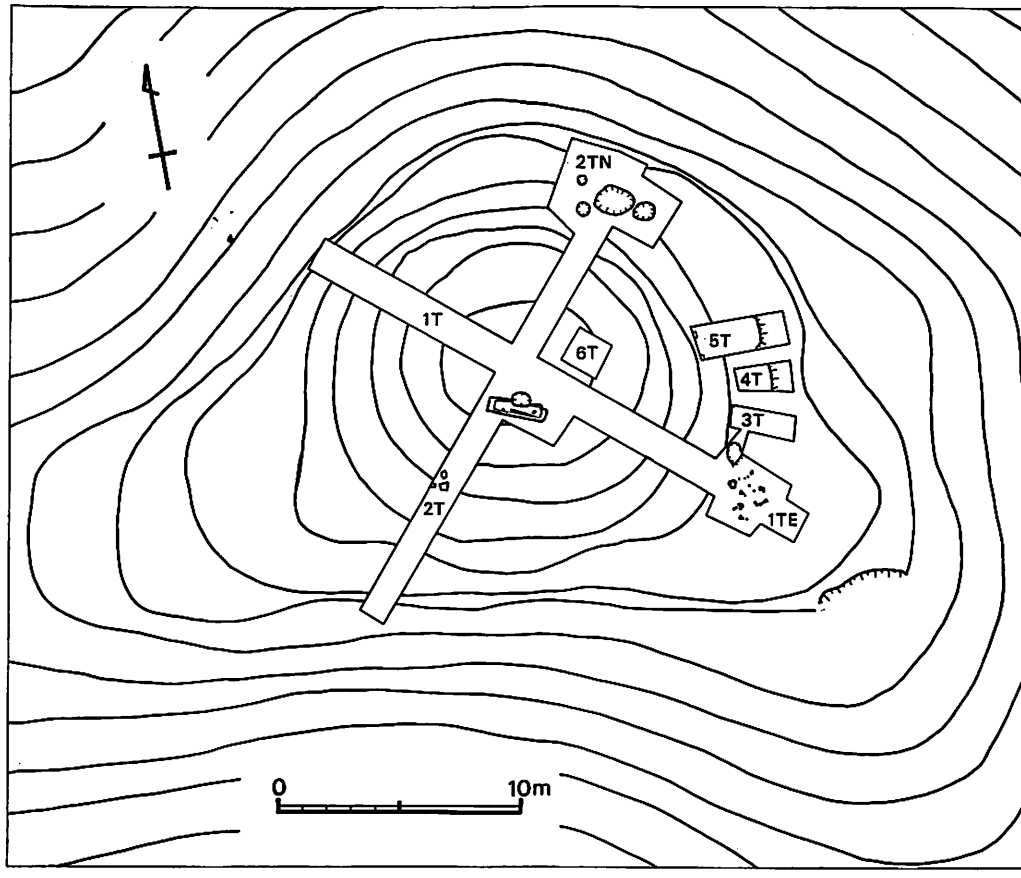
（脇坂光彦）

Ⅳ 古　　墳

1．墳丘と外表施設

墳丘は２つの頂上が鞍部で結ばれた東側の丘陵の頂にあり，規模は，南北16m東西18m，高さ2.5mの円墳で，墳頂部は南北５m，東西6.5mのやや長円形のプランをしており，中央部に盗掘による大きな凹部がある。

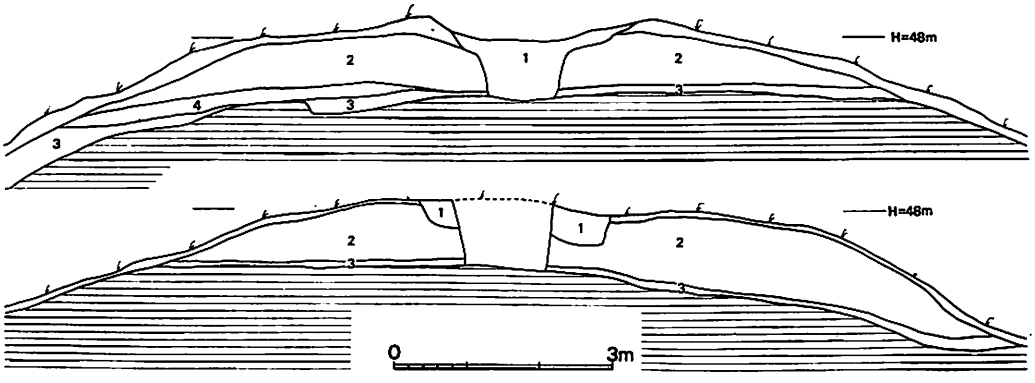
墳丘の裾には円筒埴輪をめぐらせていたらしく，各トレンチの端から埴輪の破片が出土した。とりわけ第１トレンチの東側裾からは，2.7m×1.8mの広がりをもって埴輪片が分布し，そのうちもっとも墳丘の裾に近いものは，下端部が原形に近い状態で出土した。なお埴輪以外の葺石や周溝などの外表施設は検出されなかった。



第３図　福礼古墳付近地形図

盛土は自然の丘陵に多少の整形をほどこして盛りあげているが極端ではない。この丘陵の頂上付近は，東西になだらかに延び，北および西側は急斜面となって下っている。このため，墳丘築成上の制約がプランのうえにあらわれており，やや東西にふくらんだ円墳となっている。

トレンチ断面での観察によると，墳丘中央部で表土下80～90cmの盛土の下に厚さ約10cmの炭化物を含む暗褐色有機質土層があり，旧地表面と考えられた。この下はすぐ地山になっており，赤褐色の花崗岩風化土である。この地山は第1トレンチでは墳丘中央から南東側はほぼ平坦であるが北西側は，ゆるやかに下っている。同様に第2トレンチでは，南西側はほぼ平坦であるが，北東側は下っている。すなわち，墳丘の北半の地山は全体に下降しており，この傾斜の上に盛土をしているため，墳丘南半と比較して北半分の盛土が厚い。この盛土の厚さの差は，墳頂から墳裾にゆくほど大きくなる。第1表は墳丘の南半と北半の盛土の厚さを計測したものである。盗掘坑による攪乱などによって墳丘の原形が多少変ってきていることを考慮に入れても，盛土は北と南で均一とはいえない。



第4図　墳丘断面図（上　第1T北壁・下　第2T西壁）
（1.攪乱土，2.赤かっ色土層，3.暗かっ色有機質土層，4.黄かっ色土層）

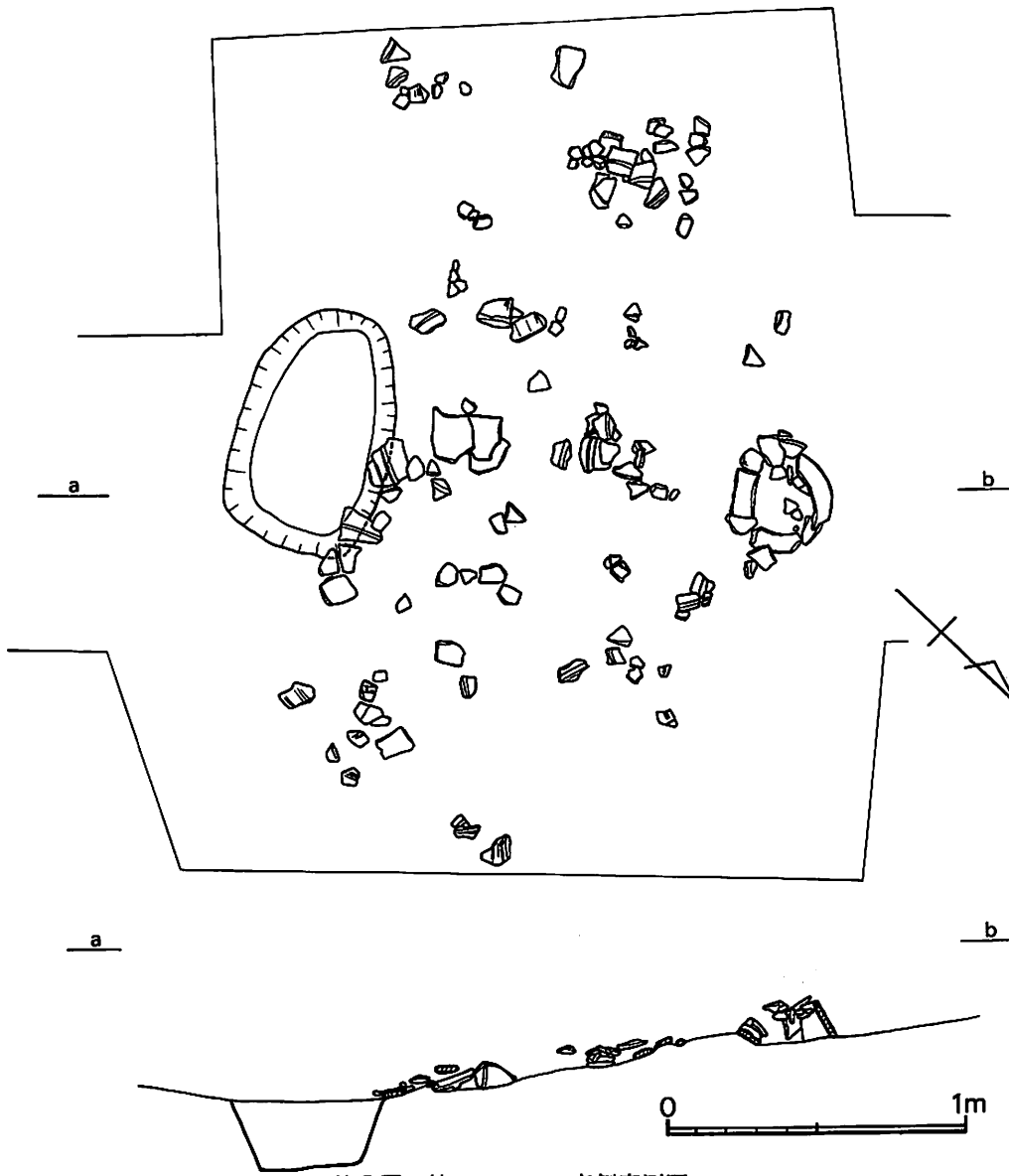
第1表　古墳盛土計測表

墳丘中央からの距離cm	150	250	350	460	550
① 墳丘南半	95 (95)	85 (80)	65 (65)	56 (25)	20 (5)
② 墳丘北半	120 (90)	115(115)	92(110)	100(105)	58 (90)
② － ①	25(－5)	30 (35)	27 (45)	44 (80)	38 (85)

第1トレンチ及び第2トレンチの厚さ。（　）は第2トレンチでの数値。

つぎに盛土自体は，部分的に炭化物を混じえる赤褐色花崗岩風化土（マサ土）の単純層で，地山と区別しがたいほどである。

これらの土は，古墳のある丘陵の東側および西側の緩傾斜面を削りとって，盛りあげ，同時に削りとった部分も墳丘の一部として整備したようである。それは第1トレンチ東側断面，および第2トレンチ南側断面で旧地表面が消失していること，北側と南側は急斜面で地形的に制約があること，墳丘の裾で周溝とはいえないが地山がいくぶん下降していること，墳丘の傾斜変換線（墳丘裾）が盛土の下端より1.5m下にあ



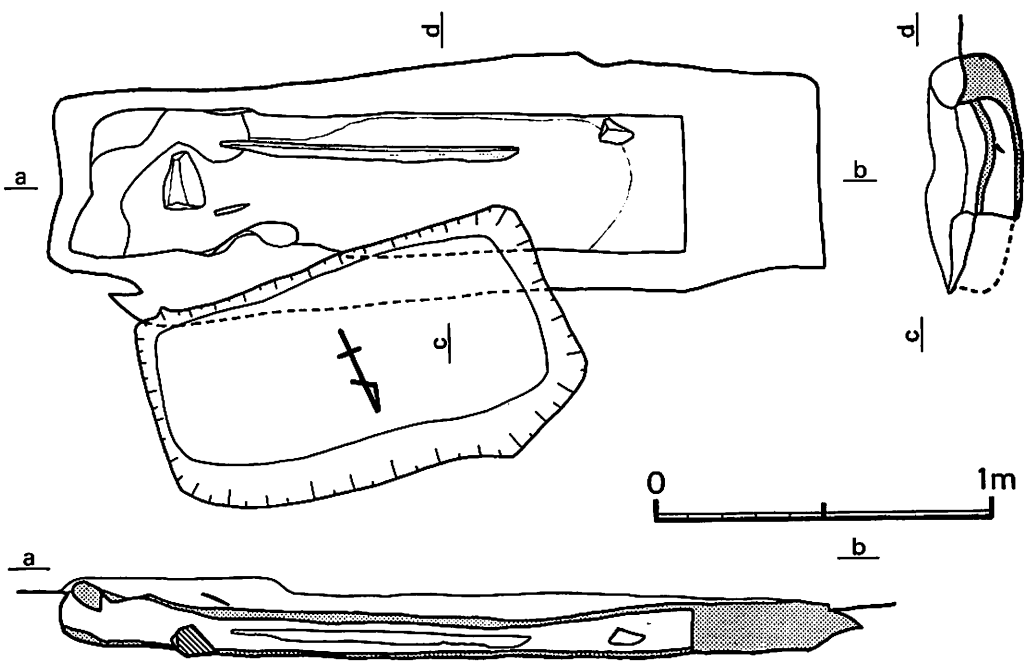
第5図　第1トレンチ東側実測図

ることなどによって推定される。従って，実質的な盛土の直径は11.2〜11.3mで高さ80〜90cmである。

2. 内部主体

主体は，簡単な構造の粘土槨というべきもので，墳頂部南端の表土下約80cmのところから検出された。槨内の形状から判断して，割竹型木棺を埋納したものと考えられ，これを暗青色の粗製粘土で被覆したものである。

この粘土槨は，地山直上の暗褐色土（旧地表面）を掘り込み，地山に接するような状態で存在しており，槨長軸がN66°Wの方位をとっている。プランはほぼ矩形をなしているが，北側中央部は後世に掘られた土壙によってえぐられている。規模は，粘土槨上面で長さ225cm，幅は両端で55cm，中央部で65cmあり，深さは20cm前後である。床面はゆるやかに西へ傾斜しており，長軸線上で，東端が西端より10cm高くなっている。粘土槨上面は木棺を安置したと思われる部分で一段落ち込み，さらに周辺から中央部に向ってゆるやかに下降し断面が弧状を呈している。その差は長軸線上で約10cm前後になる。これは木棺の上部が腐朽して陥没したことによると考えられるが，特に，



第6図　粘土槨・土壙実測図（アミ目は粘土）

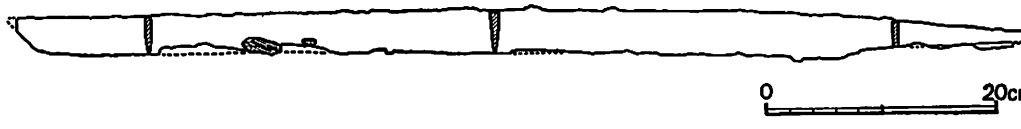
西半の落ち込みが明瞭である。この陥没の稜線から，木棺の大きさは，長さ175㎝，長径40㎝強になるものと推定される。木棺を被覆している粘土の厚さは，上面が2㎝で床面よりも厚いが，周辺と比較するときわめてうすい。すなわち，北側と南側は10㎝～18㎝，東側は5㎝～10㎝，西側は40㎝をはかる。このことは，粘土の機能が，木棺を固定させるためのものであったことを示している。

槨内は，上部粘土面から床面まで，炭化物を含んだ褐色土がつまっており，2個の石と鉄刀1，刀子1が出土した。石は槨の東端から25㎝の長軸線上に1個，槨の西端から20㎝で南壁にあるものが1個である。後者は10㎝×6㎝で長径が槨の長軸と平行しており，前者は7㎝×12㎝，高さ8㎝でその長径が槨の長軸に直交している。しかも，この東側の石は，床面の粘土上ではなく，直接地山の上に置かれていた。したがって，枕石ではなく棺台として使用されたものと考えられるが，槨西端長軸線上には同様の施設は認められず，この部分の粘土面は，槨内ではもっとも顕著に割竹型木棺特有の半円断面形を残していた。このことにより，木棺は，4度の傾斜をもたせて東側を高くして置かれたことが推定された。さらに先述のように，東側にくらべて西側の粘土を40㎝ときわめて厚くしたことは，傾斜のついた木棺を圧力の大きくなる西側で固定させるという意味があるようである。西側の小石はその一助であったかもしれないが，断定はできない。なお，西側の粘土では，下端から2㎝のところで，断面半円形の朱の広がりが認められた。

副葬品である鉄刀と刀子は，棺の東側で，それぞれ長軸の南と北に，切先を西北方に向けて出土した。これらのことから，遺体は頭部を東に向けて埋葬したものと推定された。

3. 出土遺物

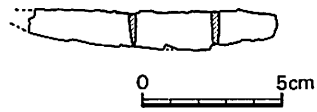
鉄刀　切先と刃部がわずかに欠損するが，ほぼ完形で，全長89.1㎝ある。このうち刃部は73㎝，茎部は16.1㎝をはかる。刃幅は，3.2～3.8㎝で切先近くでわずかにせま



第7図　鉄刀実測図

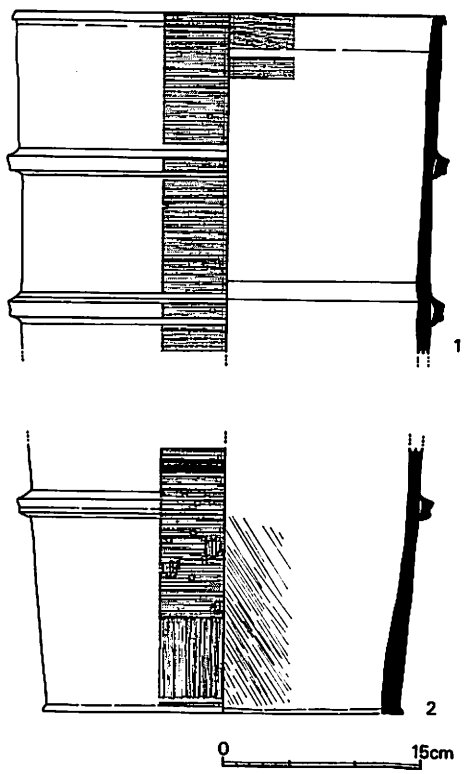
くなる。棟背の厚さは0.5〜0.8cmである。茎部は幅1〜3cm，厚さ0.5cmで，刀身に対して尻すぼみの状態になり，茎部端では，刀背のレベルより2cm低くなる。また銹のため，目釘穴の位置は不明である。茎部には部分的に木質の付着がみとめられ，拵えの一部であったと思われる。刃部は内反ぎみであり，古式の様相をしめしている。

刀子　切先が欠損し，銹化が激しく，保存の状態はよくない。刃部6.5cm，茎部2.4cm，刃幅は，はばきの近くで1.4cmをはかり，切先にむかってやせている。棟の厚さは0.24cmで，くの字状にひわっている。茎幅は0.8〜1.2cm，厚さは0.25cmをはかる。



第8図　刀子実測図

埴輪　合計136片の円筒埴輪片が出土した。第1トレンチ東側からの出土が多く，その他の調査区からは2〜3片の出土にすぎない。直径は上端で33cm，下端で27.5cmあり，高さは不明である。器壁の厚さは上端近くで1cm前後，下端で1.5cmをはかる。隆帯は，はりつけで幅2〜2.5cm，厚さ0.8〜1cmある。いずれも黄褐色を呈し，燃成はやや弱くもろい。器壁は磨滅が著しく，刷毛目も観察されない。



第9図　埴輪実測図

以上のことから本古墳の構築時期についてみれば，沼田川流域で埴輪の出土する古墳は，第2表のように，9か所が知られている。

これらの古墳，遺跡は，立地条件や出土遺物からみて6世紀以前に比定されているものが多い。

また粘土槨を内部主体とする古墳は，調査例が少なく，その性格についてははっきりしないことが多いが，三次市の四拾貫古墳群中の小原1号墳，太郎丸9号墳，陽日南10号，39墳，神辺町の国成古墳などがしられている。

第2表　埴輪出土地地名表（本郷町周辺）

名　　称	所在地	立地	墳形　内部構造	出土遺物	文　献（備考）
兜山古墳	三原市沼田東町字納所・山崎	山頂	円　墳（帆立貝式古墳？）	形象(人物)ハニワ 円筒ハニワ 手鎌・須恵器	吉野益見「安芸豊田郡沼田東村兜山古墳」考古学雑誌27—3，昭12.3
鳩岡古墳	三原市沼田東町字納所	丘陵稜線	円　墳　粘土槨	形象(家)ハニワ 円筒ハニワ 鏡2・管玉・勾玉	山田良三「筒形銅器考」古代学研究55，昭44.8
宮の谷4号墳	三原市沼田東町字納所	丘陵稜線	前方後円墳　木棺？	形象ハニワ 刀・鍬・鎌・小玉・須恵器・管玉・切子玉 須恵器（高坏・坏・ハリウ・壺）	木下忠「後期古墳群の諸問題—広島県の場合—」考古学研究9—1，昭37.6
溜箭古墳	三原市沼田西町字松江・溜箭	丘陵裾	横穴式石室（家形石棺）	円筒ハニワ	
土肥谷2号墳	豊田郡本郷町土肥谷		円　墳	円筒ハニワ	
片側古墳	豊田郡本郷町字舟木・片側		円　墳	円筒ハニワ 土師器・須恵器	
梅木平2号墳	豊田郡本郷町字下北方		横穴式石室	ハニワ	
久松遺跡	三原市沼田西町字松江・久松	丘陵斜面		円筒ハニワ 弥生式土器・土師器・須恵器・石鏃	
板箭遺跡	三原市沼田西町字松江・板箭	丘陵斜面		円筒ハニワ 弥生式土器・須恵器・土師器	

これらの古墳は，内部から出土する鏡・玉類，鉄器などから5世紀中ごろの築造と推定されるものである。

今回調査を行なった福礼古墳は，これらの古墳の立地状況，出土遺物などの点で類似するところが多いので築造時期もあまり違わない時期のものと推定される。

（金井亀喜）

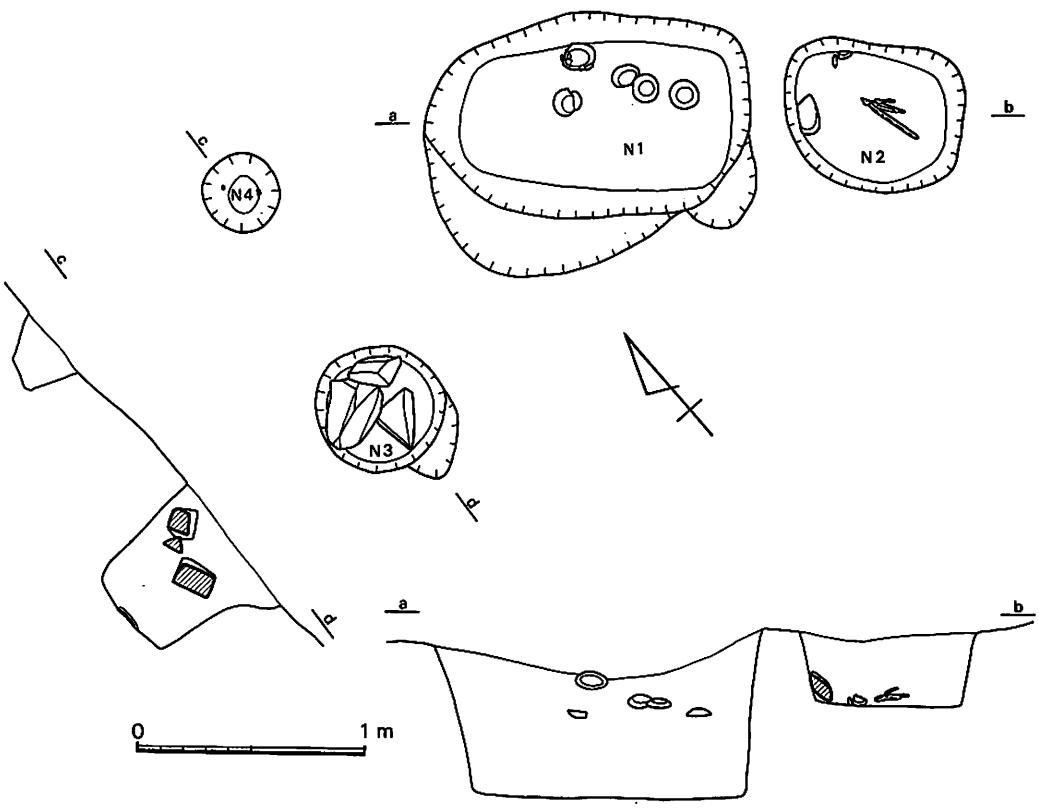
V 中 世 墳 墓

1. 土　　壙

土壙は墳丘麓の緩斜面で５基が明らかになった。そのうちN―１土壙からN―４土壙の４基は第２トレンチの北側に集中しており，いずれも旧地表面から地山である花崗岩風化土を掘り込んだものである。

N―１土壙

東西 145 *cm*，南北90*cm*の平面長円形で垂直に近く掘り込み，深さは70*cm*ある。床は平らにしており，内部には床近くに木炭が混っていたほか床から35～50*cm*高い位置から土師質皿が５枚出土した。そのうちの１枚を除いてはすべてふせた状態であり，また壁近くのものは，位置も高く中央に傾斜していたことから，これら土師質皿は土壙



第10図　土壙墓群実測図

上におかれていたものが埋土の陥没とともに土壙内に落ち込んだものと思われる。なお斜面に掘り込んでいるためか，南側は段がついて広がっており，その部分から古銭1枚が出土した。土壙上からは2枚の土師質皿が出土している。土壙内に人骨は残っていなかった。

N—2土壙

N—1土壙の東に隣接しており，東西80cm，南北60cm，深さ30cmの平面長円形の土壙である。床面には人骨大腿部，土師質皿，それに人骨に付着して漆器，古銭1枚がみられたほか，東壁に密着して20cm大の角礫が立てた状態でおかれていた。これらの遺物は，いずれも床面に近い位置にあることから，人骨埋葬時に副葬されたものとすることができよう。

N3—土壙

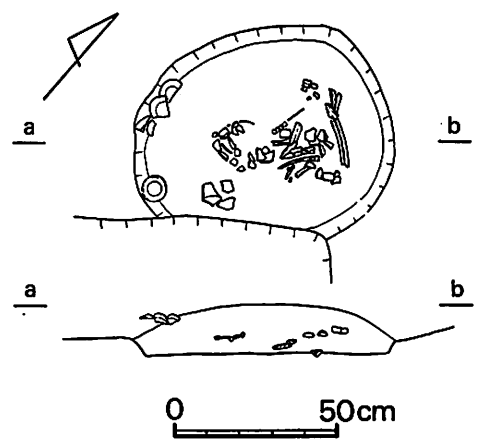
N—1土壙の西約50cmにある径55cm，深さ60cmの円筒形土壙である。内部には床面から30cmの位置に20～30cm大の角礫が3個落ち込んでおり，土壙のほぼ中央部床面には，歯の比較的よく残った人骨頭部ならびに骨片がみられた。径の割に深く，壁面はしっかりしており，また中央付近に頭骨がみられるといった状況は，他の土壙とは様相が異なり，葬法も座位屈葬—座棺と推定された。

N—4土壙

N—3土壙の北約70cmのところに径35cm，深さ25cmの小土壙を掘って，焼骨と灰，炭を埋納したもので，骨は細片となっていた。内部は炭のため黒くなっており，壁面も同様の状態であったことからみて，直葬したものらしい。

E土壙（第11図）

第1トレンチ東側に1基のみ独立して発見されたもので，N—1～N—4の各土壙とレベルはほぼ同一であり，墳丘裾の堆積土中に掘り込まれている。土壙は南側を明らかにできなかったが，径約70cm，深さ約20cmの皿状に掘り込まれていたらしく，内部には比較的保存のいい人骨がみとめられた。人骨は，壙の北東寄りに安置されていたが，その占める範



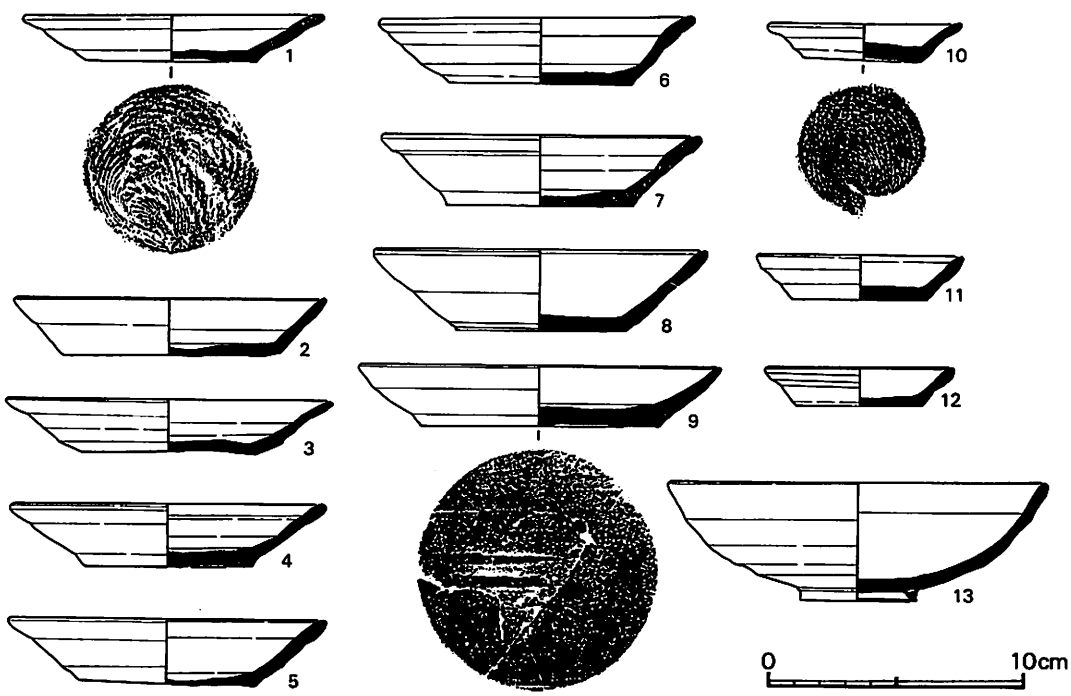
第11図　E土壙実測図

囲は狭く，各部分の骨も小さい。また頭骨，脊椎骨，大腿骨の状態から考えると，頭を南西においた右下側臥屈葬で，小児の遺体とみることができよう。なお，頭部にほぼ接して土師質皿が口縁を上にして副葬されていたほか，南西壁上の床面から約10cmの位置に，土師質小皿３枚，埦１枚（13）がみられた。

2. 出土遺物

土壙に関係する遺物には，土師質皿，小皿，埦，漆器，古銭がある。

土師質皿　土師質皿はＮ１土壙から７枚（第12図1.4～９），Ｎ２土壙から１枚（２），Ｅ土壙から１枚（３），の計９枚が出土している。いずれも焼成は比較的よく，褐色で胎土に砂粒を含んだものもみられる。２，８，９を除いては，器厚は薄く口縁が外反している。器壁内外とも水ひきのあとがみられ，平底の糸切底である。口径11.8～12.6cm，底径6.6～7.2cm，高さは1.7～2.7cmを測り，口径に比べて高さが高い。これに対し，２は，口径に比して底径が大きく，口縁部は外反していない。８はやや深めの埦に近いもので口縁は外反ぎみである。９も底径が大きいが器厚は厚く口縁は内傾している。底部はへら削り調整である。



第12図　土師質土器実測図

土師質小皿（第12図10～12）　土師質小皿はＥ土壙からのみ３枚出土している。皿に類似しており焼成もよく糸切底で口縁部は外反ぎみである。口径7.5～8.2cm，底径4.6～5.2cm，高さは1.5～1.8cmを測る。

土師質埦（第12図13）Ｅ土壙出土のもので口径は15cm，高さが4.6cmある。焼成はよくなく灰黒色を呈している。器外側には指による調整痕，内側には水ひきのあとが残っている。皿に比べて大きめのもので口縁部は内反し，底部に径4.8cmの高台がつく。

漆器　Ｎ２土壙の人骨に付着していたもので朱漆がうろこ状に残っている。

古銭　Ｎ１，Ｎ２，Ｎ４の土壙より各々１枚ずつ出土したが腐蝕が著しいため文字の判読ができない。

以上みてきたように古墳裾部で５基の中世墳墓があきらかになった。

いづれも下部施設である土壙のみが残存しており上部施設の存在はあきらかにできなかった。

これら土壙の葬法としては，火葬墓（Ｎ４）と土葬墓（Ｎ１～Ｎ３，Ｅ）の２種があった。

火葬墓は，土壙内に焼骨を入れただけの単純な埋葬のようである。土葬墓群内の火葬墓として注目されるが，後述するように当地域では江戸時代末期においても土葬の例があることからみて，時期的な差とするよりも宗教的な差によるものかもしれない。

土葬墓は，壙の状況や人骨の出土状態から屈葬と座葬に分類できる。

屈葬としては，小児骨を側臥屈葬にした皿状のＥ土壙と，深く掘り込み内部に土師質皿を副葬していたＮ１土壙，人骨，皿，漆器，古銭の出土したＮ２土壙がある。

Ｅ土壙の類例としては草戸千軒町遺跡[1]内発見の土壙がある。この土壙は室町時代以降に比定され，墓壙に接して墓標の存在が推定されるなどＥ土壙とはやや様相を異にしているが出土した土師質埦はＥ土壙出土のものと類似しており，ほぼ同時期の築造と推定される。

出土の土師質土器についてみれば，器厚は薄く，口縁部が外反し，口径に比べて高さがやや高いという特色をもっており，山田積石塚[2]（高田郡甲田町）出土の土器に類似していることから室町末期に比定できる。

座棺形態のものとしては，Ｎ３土壙がある。内部に人骨が残る円筒形の土壙である。

尾原川の対岸の陣べら遺跡[③]で発見されたうちの２基に似ている。また，Ｎ３土壙内に角礫が落ち込んでいたが墓標的な性格をもっていたかどうかははっきりしない。

これら５基の墳墓の被葬者については，墓標や墓石が存在しないためあきらかにすることができないが最も単純な形態の墳墓として庶民階級の墳墓と考えられる。また，築成年代については，形態や，出土遺跡から戦国末期を中心とした時期が考えられよう。

（小都　隆）

（注）

① 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報』(1972)

② 小都隆，中田昭『山田積石塚発掘調査報告』(1972)

③ 潮見浩『陣べら遺跡発掘調査概報』(1971)

Ⅳ まとめ

以上みてきたように,福礼古墳は丘陵頂上を整形盛土して築成した,直径16～18m,高さ2.5mの規模をもつ円墳で，粘土槨を内部主体とすることがあきらかになった。しかし，この古墳は，遺物の出土が少ないため，積極的に時期的な位置づけをおこなうことは困難である。沼田川下流域における古墳時代前半期に比定される古墳についてみると，現在わかっているもので主要なものは，前方後円墳で画文帯神獣鏡，硬玉製勾玉，人骨の出土した宮地川古墳（本郷町下北方），箱式石棺で倣製鏡，勾玉，管玉，小玉類の出した梨羽古墳（本郷町小原），粘土槨を主体とし，埴輪，鏡，玉類，武具，工具類の出土した鳩岡古墳①(三原市沼田町)，前方後円墳で木棺直葬の宮の谷4号古墳②(同前)，土師器壺，坏，刀子などを出土した陣べらC10箱式石棺③（本郷町陣べら)，それに，粘土床から須恵器，鉄刀の出土した陣べら1号古墳などがあげられる。この外，内部主体はあきらかでないが，丘陵頂上に立地し，直径が48～53mある兜山古墳④（三原市沼田東町）がある。三重の埴輪円筒列と葺石の施設をもち形象埴輪，手鎌，須恵器が出土している。

このうち，宮の谷4号古墳，陣べら1号古墳は，いずれも第Ⅱ型式に比定される須恵器が出土しており，6世紀初頭に位置づけられているが，他の古墳については，出土する遺物から，5世紀の築造になるものと推定されるものである。

また，広島県内で粘土槨による木棺直葬古墳の主要なものとしては，浄楽寺1号古墳⑤，四拾貫39号古墳⑥，四拾貫太郎丸9号古墳⑦，四拾貫小原1号古墳⑧(以上三次市)，国成古墳⑨（神辺町）などがあるが，その数はあまり多くない。

これらの古墳は，出土する鉄器，玉類，などから築造時期も5世紀中ごろ前後と推定されている。

今回調査した福礼古墳については，立地条件や出土遺物などを，県内のこれらの古墳のそれと比較してみて，類似する点が多いので，その築造時期は5世紀中ごろから後半にかけてのものと推定される。

いづれにしても，本古墳の性格については周辺の古墳の調査をまって検討すべき点が多いといえる。

つぎに古墳墳丘の東および北側の裾部で発見された5基の墳墓についてみる。

県内において中世～近世の墳墓の調査は，昭和39年の西坊墳墓群[10]（双三郡吉舎町）の発掘調査にはじまり今回の調査を含めて7か所が実施されたのみであり，調査例が少なく不明な点が多い。

これら墳墓の埋葬時期や形態の地域差の有無などについては，今後の研究にまたねばならないが福礼発見の墳墓は，その形態や出土遺物が，草戸千軒町遺跡[11]発見の土壙や山田積石塚[12]出土の土器に類似していることから考えて，その埋葬時期は，戦国時代末期のころと推定できる。

福礼古墳および墳墓は，宅地造成に先立つ事前の緊急調査として発掘を実施した。調査を行なうに際しては，開発関係者と文化財保護行政側との事前協議が遅れ，工事計画を知ったのは土地買収もほぼ終り，工事着工直前であった。このため，県教委では，設計変更による保存が困難な状態にあったため，緊急発掘調査を実施せざるをえなかった。開発事業者の多大な協力があったため調査前の破壊は，何んとか免れることができたが，開発計画の察知が遅れ，事前協議の徹底がはかれなかったことについての責任が痛感される。これとともに，調査の時期が天候の不順な時期にあたったため必要最少限の部分に限られたことが残念である。　　（金井亀喜）

（注）

① 山田良三「筒形銅器考」（古代学研究 55，1969）
② 木下　忠「後期古墳群の諸問題—広島県の場合—」（考古学研究　9—1，1962）
③ 潮見　浩『陣べら遺跡発掘調査概報』（陣べら遺跡発掘調査団，1971）
④ 吉見益見「安芸豊田郡沼田東村兜山古墳」（考古学雑誌 27-3，1937）
⑤ 松崎寿和・潮見浩「常楽寺古墳群発掘調査報告」（『双三郡三次市史料総覧』1956）
⑥ 昭和41年に県教委（担当　松崎寿和）が発掘調査した。
⑦ 本村豪章「備後三次市太郎丸古墳発掘調査報告」（古代吉備　4，1961）
⑧ 潮見　浩『四拾貫小原』（四拾貫小原古墳発掘調査団，1968）
⑨ 村上正名『国成古墳』（神辺町文化財シリーズ №1，1965）
⑩ 河瀬正利「吉舎町敷地古墳群緊急調査について」（広島県文化財ニュース 第23号，1964）
⑪ 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報』（1972）
⑫ 小都隆・中田昭『山田積石塚発掘調査報告』（甲田町文化財保護委員会，1972）

あ　と　が　き

本報告の作成は，金井亀喜，脇坂光彦，小都隆の分担執筆により金井が編集した。

なお，遺物・図面の整理には，文化財保護室々員の協力をうけた。

昭和48年3月印刷

福礼古墳発掘調査報告

編集発行　広島県教育委員会

印　　刷　朝日精版印刷株式会社